

と手を鳴らしますと、女中が抱いて参りました。

「これ婆さん私の眼鏡を出しとくれ、どれ〜。婆さん眼鏡を掛けたら眞つ暗になつて何も見えへんがな」

「お爺さん、貴方まだ眼鏡の鞘が外してござりまへんがな」

「あゝそうか、大分うろたへて居るのんや。ドレ〜、ほんに宜い子ぢや動いてる」

「生て居りますね」

「アハハハハ、坊んかいな、坊んかいな……」

「お爺さん妾にも抱かしとくれ、オウ〜兩親に能う似て宜い子ぢや……」

「兎も角も、お風呂へお這り入遊ばせ」

とこれからお兩人をお風呂へ入れて、お上りになる迄に着物をば、チャンと拵らへて置いて、風呂から上ると着物を着替へさせます。と御飯の仕度が出来て居ります。床の前に老夫婦を座らしまして、此方には若夫婦が座りまして其れへ御膳が出ます。種々な御馳走を取寄せまして、久し振りで親子が四方山の話をして致しまして御飯を済しました。

「定めし今日はお疲れで御座りませう。また明日も、明後日も、緩々とお話しを申し上げます。今夜はどうぞ此方でお寝み遊ばせ。これお花や御案内申し」

「ハイ、御案内致します。どうぞこちらへ」

縁側から廊下傳いに離れ座敷へ連れて参りました。結構な夜具が敷いて枕元には有明行燈が置いて御座ります。蓆盆から水差しと至れり盡せりで、

「さあどうぞ御緩くりお寝み遊ばせ、御用事がござりましたら……」

「ハイ〜モウ決して構ふて下さんな。それでは明日又緩つくり逢ひます。モウ寝とくなされ、私等も寝さして貰ふ」

「さよなら、お寝み遊ばせ」

兩人は寢所へ這入りましたが嬉しうて、なか〜寝られまへん。

「これ婆さん、お前どんな氣持がするな」

「ハイお爺さん、妾は餘り嬉しいので夢ではないかと思ひます」

「そうやろ〜、いや眞理ぢや、私かて、そう思ふた。先刻風呂へ這入つてる時に、何遍も頬片をめぐつて見たが、私もなんや夢を見る様な氣持がして、何もならん」

「妾もこんな嬉しい事は御座りません」

「イヤ〜夢やない、眞實や、これと云ふのも皆觀音様の御利益や、あゝ有難い。南無大慈大悲の觀世音菩薩……」